

精神分析と文化記号論

(1)

鈴木喜久男

ロトマンはその論文「意味の体系の簡略化と発展」において、フロイトの幼児性欲論を否定する形で、コード数の多い記号体系からコード数の少ない記号体系への《翻訳》というモデルを提唱している。ロトマンによれば、幼児は複雑な大人の世界（それは当然ながら子どもには理解できない意味にみちている）を、自分にも理解しうる単純な世界へと《翻訳》する。人間の数は自分・父親・母親の3人に限定され、同時に事物も簡略化され、複雑な意味も善・悪・快・不快・恐怖といった単純な概念に翻訳される。（ロトマンはさらに、この大きな記号体系から小さな記号体系へのコード転換を、一般の文化間の問題へと拡大するが、ここではそれについては触れない）。それゆえ、《子どもは、『赤ずきん』の物語を聞くと、自分の世界に付加的な人物を入れるのではなく、物語の登場人物を自分の幼児世界にいる人物と同一視する。したがって、赤ずきんちゃんを自分自身と、狼を父親と、おばあさんを母親と、同一視することはごく自然であって》、子どもが狼を父親と同一化するのは、父親にたいして反感を抱いているからではなく、物語の登場人物を手持ちの人物（自分・父親・母親）にあてはめる必要性によるのである。したがって、《狼と父親との同一化を説明するために、フロイトのように、子どもが目撃した両親の後背位性交という〈原光景〉を想像する必要はない》。この最後の部分は、有名な《狼男》⁽³⁾について、フロイトを批判しているのである。

ロトマンのフロイト批判の焦点はその無意識論であるが、その際ロトマンはヴォーシノフ＝バフチーン⁽⁴⁾のフロイト批判を継承している。バフチーンはフロイトの無意識論を次のように批判する。《フロイト主義が考えている心理学の基本的構成を検討してみるならば、この心理学が知覚、表象、欲望、感情、すなわち旧心理学の〈精神生活〉を作り上げていたのと同じ要素から成り立っていることが分るだろう。さらに、これらの心理的要素のすべてが、おまけに一般化した通俗的な意味で、まったく無批判にフロイトによって無意識の領域に移入されるのである。（……）だが、我々には、意識とのアナロジーによって無意識を組み立て、その無意識のなかに、我々が意識において発見するのとまったく同じ要素を仮定する権利があるだろうか》。《フロイトの無意識は原理的には意識となんら異なっていない（……）》。それは意識の別の形態にすぎず、イデオロギー的に異なったその表現にすぎないのである》。要するに、バフチーンによれば、フロイトの無意識は意識のアナロジーにすぎず、したがって意識とは別箇に無意識というカテゴリーを設定する必要はないのである。この無意識否定論の基礎になっているのは、精神分析の方法の特殊性への注目とその読みかえである。バフチーンによれば、《無意識の産物は我々がそれを意識の言語に翻訳するときのみ、手に入れることが可能である。患者自身の意識以外に、直接無意識に接近する方法は他にないし、またありえない》⁽⁵⁾。ロトマンは、われわれがここで問題にしている論文の冒頭で、次のように述べている。《フロイトの精神分析のモデルは、無意識のリビドーの表出を一方の極、患者の言葉による証言を他方の極とする、一連の鎖である。この両極の間で、象徴の置換、変形、記号の代入が行なわれる》。精神分析のこうした読みかえにもとづいて、ロトマンは、幼児心理学から自然のレベルを排除し、すべてを文化のレベルで解明しようとするのだが、ここではいくつかの問題を指摘しておきたい。

まず、ロトマンによると、まるでフロイトがフロムやベッテルハイムのように童話の精神分析的解釈をしているようだが、フロイトは《狼男》⁽⁹⁾の不安夢を形成した⁽¹⁰⁾ものとして、仕立屋と狼の話、『赤ずきん』、『七匹の子やぎ』の3つを結び合わせているのであって、話はそう単純ではないよう

に思われるし、そもそもロトマンは、狼と父親との同一視をコード転換によって説明しようとする際に、子どもは狼と父親と同一視するというフロイト派の解釈を前提としているように思われる。ユング心理学の立場に立てば、狼を母親と同一視することも可能であり、不自然なことではない。

また、ロトマンによると、まるで子どもが『赤ずきん』を大人の世界として受容し、それを自分の世界へと翻訳するかのようだが、それならばどうして『赤ずきん』が童話として広く世界の子どもに読まれているのか。ペローの聞き手は大人たちだったが、赤いずきんを被った女の子の話は11世紀から存在しているのだし、今日かくも広く読まれ(聞かれ)ている。しかも大人の興味はあまり惹いていない。このことを、文化レベルでのコード変換によって説明することはむずかしいように思われる。⁽¹¹⁾むしろ、子どもは大人よりも無意識の世界の出入りが容易で、そのために童話のもつ無意識的なものに敏感で、大人はそれを抑圧していると考えた方が納得がゆくのではないか。となると、問題はやはり無意識の存在を認めるかどうかということになる。この問題をさらに探求するために、鍵になるように思われるのは、《無意識は言語として構造化されている》とするラカンのテーゼ、そして箱庭療法に顕著にあらわれているユング心理学の無意識的イメージの問題を、文化記号論との関連において考え直してみることはなかろうか。

註

- (1) 本稿は、筆者が当大学院のゼミで行なった《バフチーンの問題提起》と題する発表の補足である。
- (2) Лотман, Ю.М., О редукации и развёртывании знаковых систем, Материалы всесоюзного симпозиума по вторичным моделирующим системам, 1(5), Тарту, 1974, стр. 100-108.

このロトマンの論文は、枝川昌雄氏の論稿「精神分析と二つの記号論」(「現代思想」臨時増刊・ラカン特集, 1981)に紹介されている。筆者がこのロトマンの論文の存在を知ったのはこの枝川論文によってであり、本稿の前半部は多くを枝川論文に負っていることを銘記しておく。

- (3) フロイト「ある幼児期神経症の病歴より」、フロイト選集第16巻『症例の研究』小此木啓吾訳、日本教文社、P.221-389
- (4) ヴォーロシノフ=バフチーン『フロイト主義』磯谷孝訳、新時代社。
- (5) ヴォーロシノフ=バフチーン、前掲書、P.129-131。
- (6) 同上、P.162
- (7) 「バフチーンは、精神分析学の対象にコミュニケーションの視点から接近する方法を基礎にして、精神分析学を記号論的に読みかえ、解釈し直すという道を最初に示唆した一人です」(イヴァーノフ「記号・発話・対話に関するバフチーンのが今日の記号論に対してもつ意義」北岡誠司訳、「現代思想」1979年2月号、P.119)

cf. Benveniste, Remarques sur la fonction du langage dans la découverte freudienne, in *Problèmes de linguistique générale*, 1, p. 75; Kristeva, *Le langage, cet inconnu*, coll. Points, p. 264.

- (8) ヴォーロシノフ=バフチーン、前掲書、P. 62
- (9) フロム『夢の精神分析』外林大作訳、東京創元社、P.241-247
- (10) ベッテルハイム『昔話の魔力』波多野完治他訳、評論社、P. 223-242
- (11) 秋山さと子『おとぎの国に住む子どもたち』公文数学センター、P. 82
- (12) ベッテルハイム、前掲書、P.241。